

ルカ 14・25-33

「父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない」。今日の福音のイエス様のことばは、私たちにとって大変刺激的であり、衝撃的ですからあります。

今更言うまでもなく、私たちの信仰するキリスト教は「隣人愛の宗教」であります。そして「父母を敬え」という十戒のことばも、私たちは知っています。しかるに、それらとは正反対の考えとも取れるイエス様のことばを、果たして私たちはどう理解すればよいのでしょうか。

私たちがここで一番びっくりしてしまうのは、「憎む」ということばですが、これは今日の「聖書と典礼」の解説にもありますように、「より少なく愛する」という意味です。しかし意味が分かったとしても、普通ならば、先ず家庭や自分の命を優先するのが、目の前にある愛すべきもの、守るべきものを優先するのが、私たちにとっては普通の感覚なのではないでしょうか。「神父やシスターならともかく、私たちには家庭がある。イエス様の言うことは分かるけど、私たちは家族への愛を第一に考えざるを得ない」、恐らくここにいる皆さんも大半の方がそう思うのではないのでしょうか。

しかし、ここでイエス様は12人をはじめとするある特定の弟子たちだけに、このことばをかけられたのではありません。ついて来る多くの群衆、つまり神父やシスターだけではなく、ご自分を信じる全ての人にこのことばを投げかけたのです。「わたしに従うことを優先させよ。人よりも神を優先させよ」と。ここにイエス様のどんな思いが込められているのでしょうか。

ここで、ある人の書いた本の一節を読ませていただきます。その人が誰かという、『長崎の鐘』で有名な永井隆博士です。長崎の原爆で被爆後、多くの本を書き、平和を訴えて亡くなった永井博士は皆さんご存知だと思いますが、『この子を残して』という本の中に「第一のおきて」という文章があります。今日のイエス様の教えを解くヒントになるかと思しますので、その一節をちょっと読んでみます。

「人の守るべき最大のおきてについてイエズスは、『なんじ心を尽くし、霊を尽くし、意をつくして、主たるなんじの神を愛すべし。これは最大なる第一のおきてなり。第二もまたこれに似たり。なんじの近き者を己の如く愛すべし』と言った。この第一のおきてこそは私などがつねに実行しなければならないものである。第一のおきてを守らずに、第二のおきてを正しく実行することはできない。第一のおきてを忠実に守るならば、第二のおきてはおのずから実行せずにはおられなくなるものである。ところが、主たる神を愛さなくても、隣人を愛することができる、と知っている社会事業家が多い。

主たる神を愛するどころか、忘れてしまっている者、あるいはさらに積極的に神の存在を否定している者で、人類愛に基づく事業を企てている。神の恵みがなくても、人間の力だけで、立派に愛の事業ができると思いこんでいる。限りなき愛の泉から神を追放し、その後己が座り、惜しみなく愛をそそぐぞとうぬぼれているのだ。それほど思い切って神を否定しないまでも、まあ孤児の世話ぐらいは神様の加勢を頼まなくても自分の力だけでやれる、と思っている人も多い。そんな人のそんな事業は、うまくゆかぬものである」。

神を第一にすること、それは決して人をないがしろにすることではありません。神を先ず愛するからこそ、私たちは神が慈しんで創造された人間を愛することができるのです。「使徒ヨハネの手紙」の中に、「神を愛していると言いながら、兄弟を愛さない者がいたなら、その人は偽り者です」ということばがあります。これも「神を愛していると言うなら、隣人も愛せ」という命令ではなく、「神を愛しているなら、おのずから神が創られた人間も愛することができる」というヨハネの確信なのです。

家族を愛し、友を愛し、隣人を愛す、それはすばらしいことです。しかし、こう私たちが決意しても、その心に「神」という方がいなければ、ふとしたことで家族の者といさかいを起し、友達とけんかをし、隣人と戦争をする。神なき愛の行き着くところは、結局こういうところではないでしょうか。神のいないところ、「愛」はいつでも「憎しみ」に変わる可能性を秘めているのです。それは今日の福音にある通り、予算を考えずに塔を建てたり、自分の兵を計算せずに戦って、結局失敗する、見切り発車と同じことなのです。

神を第一に愛するからこそ、私たちは神が祝福し、愛を注いだもの、つまり人間を、世界を、生きとし生ける全てのものを愛することができる。神様の私たちへの愛は、憎しみに変わることはありません。神様が私たちに注ぐ愛は、「全能の神」そのもの、神ご自身だからです。そしてこの私たちに与えられた「神」、それこそがイエス・キリストなのです。

イエス様は、何よりも神様の御心を第一に考える、この姿勢を生涯貫き通しました。この父なる神への愛があったからこそ、ご自分を投げ打って十字架を担うことができ、十字架上で嘲りの声を聞いても、その人たちを愛することができたのです。現代の人で言えば、福者マザー・テレサがよい例でしょう。

「自分の十字架を背負って…」、「持ち物を一切捨てないならば…」、確かにイエス様の要求は厳しく、激烈です。しかし私たちは「片手間に」イエス様についていくことはできない。「片手間に」神を愛することはできない。片手間に神を愛する人、それはすなわち目の前にいる大切な人も、片手間にしか愛せない人なのではないでしょうか。神様の私たちに対する愛は、いつでも真剣です。御子をいけにえとして十字架にかけるほどに真剣です。この神様の真剣さ、誠実さに、私たちも誠実に応えたいものです。

では具体的に、神様を第一に愛するとはどういうことなのでしょう。私たちは本当

に神様を第一としているのでしょうか。それは、自分に反感を持つ人、自分に敵対する人が目の前に現れたときに分かるのでしょうか。そのときこそ、イエス様は「自分の十字架を背負って従いなさい」と私たちに語りかけられます。「目には目を、歯には歯を」ではなく、その人のために祈ることができたなら、私たちは正に、神様への愛を生きていると言えるでしょう。

父と子から派遣される聖霊が、私たちの心を神様への愛で燃え立たせてくださいますように、そして、神の愛によって、私たち人間同士が、互いに赦し合い、愛し合うことができますように、このミサで願い求めましょう。

カトリック高円寺教会  
助任司祭 林 正人